

加納城跡

【所在地】岐阜市加納丸之内ほか

【時代】古代～近世

【特記】昭和58年国史跡指定

【概要】

加納城は関ヶ原合戦後の慶長6年(1601)、徳川家康が現地を見分し、本田忠勝により、翌年から築城が開始されたとされる。その場所は、戦国時代に守護代の斎藤氏が築いた加納城(中世加納城)の跡地であった。



加納城南から北を望む

初代城主は家康の娘婿である奥平信昌で、以後大久保氏、戸田氏、安藤氏、永井氏と譜代大名が歴代の城主を勤め、明治を迎える。当初は10万石とされるが、徐々に石高を減じ、最終的には3万2千石となった。

城は、東と南に荒田川、北に清水川が流れる場所に立地し、唯一地続きとなる西には長刀堀を掘削し、水に囲まれた平城としている。城域の大手門は中山道に開き、三の丸、厩曲輪、二の丸を経由して、本丸に至る。また本丸の南には大藪曲輪が設けられていた。本丸には突出した出柵形が設けられ、凸字形をしている。近世徳川系城郭の一つの特徴として、「加納城型」と提唱されている。

現在は全ての堀が埋められているが、本丸の石垣と土塁、堀の痕跡、二の丸北の石垣などが残っている。

【主な発掘調査成果】

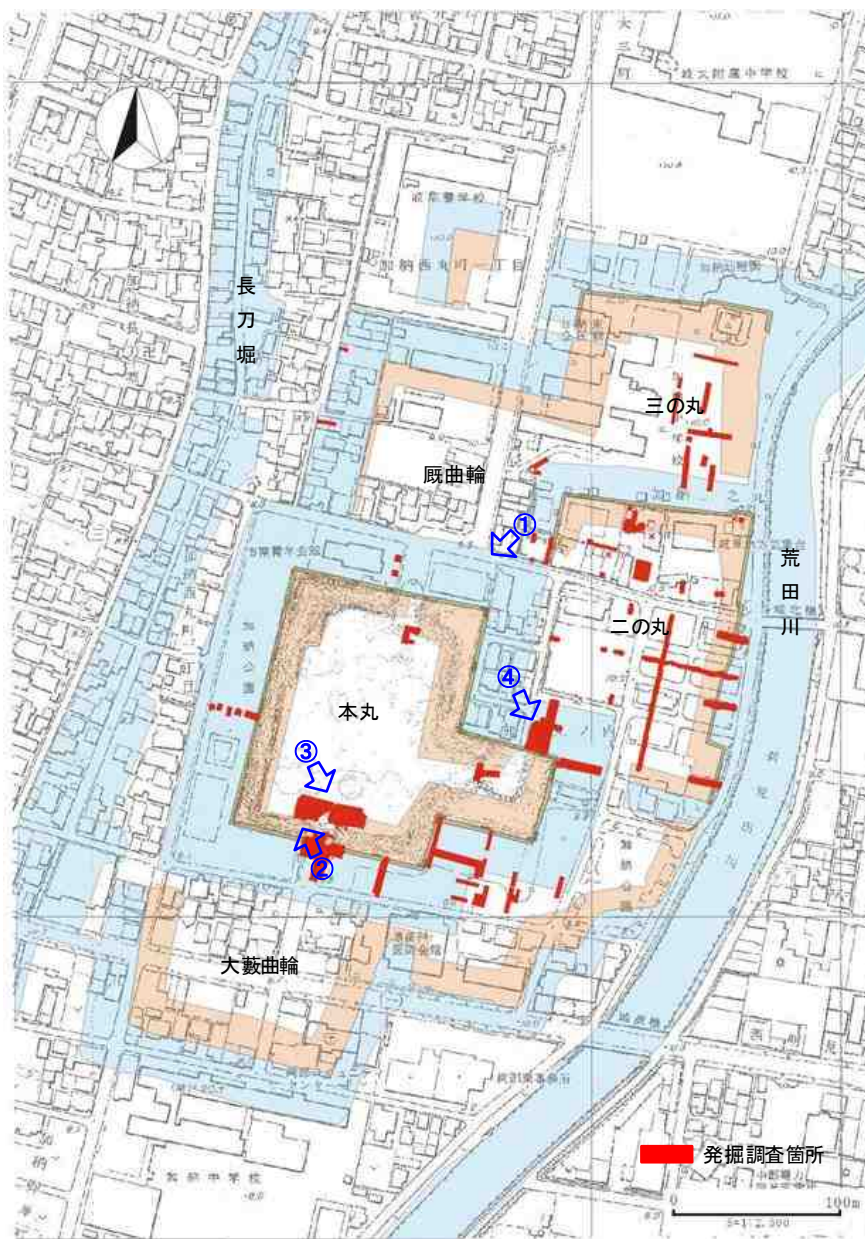
昭和63年度より、史跡整備に伴う発掘調査を実施しており、本丸内の調査は平成16年度までで10回を数える。

平成元～2年度(2次)の本丸南門南の堀の調査では、本丸内から運び出された土の中から江戸時代初め頃の遺物が大量に出土した。文献からも推測される築城当初の本丸御殿の存在が示唆される。

平成11年度(6次)の本丸南門の調査では、現在失われている内柵形の石垣と土塁、通路が確認された。また下層より中世加納城のものと考えられる土塁が発見され、中世加納城を埋めて加納城が築城されたことが裏付けられた。

平成16年度(10次)の本丸出柵形北の堀の調査では、底に格子状の畝状の高まりが発見され、堀障子構造を持つことが分かった。過去の堀の調査でも畝が見られることから、堀障子は本丸を全周する可能性が高いと考えている。

平成12年度には、二の丸で緊急調査を行い、御殿のものと見られる礎石や残飯を捨てたと見られる穴などが見つかり、当時の大名の生活の様子を窺うことができる貴重な資料を得ることができた。



①本丸北面の石垣(現状)



②江戸時代の地面と中世加納城の土塁(H11)



③本丸南門の内柵形(H11)



④本丸北堀の堀障子(H16)